中国総合研究センター紹介

独立行政法人科学技術振興機構中国総合研究センター長　馬場錬成

皆さん、きょうは、御臨席いただきまして、ありがとうございました。当センターの概要につきまして、時間の都合がありますので、大急ぎで御紹介したいと思います。詳しくはといっても要点だけでございますが、お手元に中国総合研究センターを紹介したパンフレットをお配りしてありますので、これを後ほど見ていただければと思います。それでは早速、始めます。

最近、この 2000 年以降、急速に力をつけてきた中国の科学技術について、大急ぎで御紹介したいと思います。例えば研究開発費を購買力平価換算値にいたしますと、今や世界第３位で、2006 年すなわち今年、中国は日本を抜いていくというように予想されております。それから研究者数は今、世界第２位でございます。論文数は、この後も中国の先生から御発表があると思いますが、世界第５位にランキングされておりまして、間もなくこれもトップ３に入ってくるという予想でございます。（講演資料Ｐ２参照）

それから最近の中国の躍進する研究成果の主なものだけ申し上げますと、カーボンナノチューブ、これは日本の飯島澄男先生が発見して命名したものでございますが、この論文数では 2001 年に日本を抜いて世界第２位に躍り出ている。それからスパコンですが、１秒間に 10 兆個の浮動小数点演算で、一時、世界トップ 10 にランクインしている。そのような成果を挙げております。それから知的財産権でございますが、中国はこのように右肩上がりに毎年出願件数をふやしております。この右肩上がりは 2020 年まで続くだろうというのが、中国の知的財産関係の弁護士、弁理士の予想でございます。（講演資料Ｐ３参照）

それからグラフの下の方に書いてあります商標出願数は、2001 年からアメリカを抜いて世界トップ。ただし商標の出願の手続きは、中国はアメリカや日本と若干違います。中国の方が、件数が多く出るような手続きになっておりますけれども、しかしそれでも、今、ダントツでございます。それから実用新案は、もう、とうの昔に韓国を抜いてトップ。それから意匠出願も 2002 年からドイツを抜いて世界トップに躍り出ている。特許出願数では、今現在、多分、推計値でございますが、2006 年の推計値で、出願数で中国は世界５位に躍り出てくる。先ほど中国の研究者と話しても同じような見解でございました。知的財産権は科学技術研究の成果の一つでございますが、そのように、たくましく発展しているということでございます。（講演資料Ｐ４参照）

それから、これを見てください。日中大学の特許出願ランキング。中国側は 2005 年、日本は 2004 年で、ちょっと、年度がそろっておりませんが、このトップ 10 を見ますと、中国のナンバースクールである大学の方が、はるかに特許出願数で日本の大学を凌駕している。そういう結果が出ておりまして、これで日中の大学も、お互いに競争意識を持って切磋琢磨していってほしいと思うわけでございます。（講演資料Ｐ５参照）

研究開発投資は今までの実績値で言うと、購買力平価換算値でございますが、実線のような状況になっていますが、2010 年の予測をすると右側のグラフの右端に書いてありますようなところへ、中国は伸びていくであろうと、こういうことでございます。ですから、世界有数の科学技術大国に、中国は発展していくということが予想できるわけでございます。これまでＪＳＴは、日中科学技術協力事業でさまざまなことをやってきました。このことについては、先ほど沖村理事長からも簡単な御報告がありましたので、割愛して次へ行きたいと思います。（講演資料Ｐ６参照）

さて、ここからが本題の、中国総合研究センターのミッションと事業でございます。私たちのミッションというのは、簡単に申し上げれば科学技術という分野を通じて、お互いにその研究の成果あるいは研究の状況を伝えあって、あるいは研究協力をしながら理解を深めていく。そういう役割を、これからやっていきたい。このように考えております。情報をお互いに、単に開示するだけではなくて、学術交流としまして、例えばシンポジウム、ワークショップ、あるいはお互いに研究者を派遣するというような、研究協力体制も、私たちはお手伝いしていきたいと考えております。（講演資料Ｐ７参照）

事業内容としましては、ここに書いてありますように、日本の科学技術動向等の紹介、それから逆に中国の科学技術動向等の紹介。それから中国文献の紹介、日中共同での政策研究。このような、科学技術という一つの分野で、日中で協力しあっていこうというのがミッションと事業内容でございます。（講演資料Ｐ８参照）

さて具体的には、この中国総合研究センターのホームページでございます。今ごらんになっているのは日本語版でございます。ここにありますように、センターについてとか中国の基本データ、あるいは中国の科学技術関係機関、それから中国文献データベースというようなサイトにすぐジャンプするようにできております。それから中国関係機関へのリンクとしまして、きょう、中国から多数のお客様を来賓としてお招きしましたけれども、中国科学院等々の関係機関へすぐにリンクできるようになっています。中国の科学技術関係の論文、それから研究成果、そういうものを、できるだけ簡潔に、迅速に、日本の国民に知ってもらうということでございます。（講演資料Ｐ９参照）

これだけですと、日本語版だけに見えますが、実は私どもは、中国語版の案も考えております。今これは、言葉の関係もありまして、一生懸命、つくっている最中でございますが、今年中には中国語版のホームページを立ち上げて、ぜひ、中国の方にも不自由なく見られるようなものにしていきたいと考えております。（講演資料Ｐ１０参照）

最後に、当総合研究センター設立の意義でございますが、日中の相互理解の促進でござ

います。ここに２つ書いておりますが、相手側の科学技術政策や研究開発の取り組みについて十分な相互理解が、今までは得られていない。それなので、この機会をとらえて、相互理解を深めていこう、と考えております。それから、双方の科学技術の動向をお互いに交換しあって理解を深めていこう、というのも大事なことと考えております。２つ目の柱は、日中の共同研究を希望する研究者を支援する情報の提供を行っていきたい。そして日本、中国ともに、Win-Win の関係をつくり上げて相互理解を深めていって、両国の繁栄、さらに世界に貢献できるような、アジア発の科学技術成果を示していきたいというのが最終的な希望でございます。（講演資料Ｐ１１参照）

大変駆け足で御紹介いたしましたけれども、以上でございます。今後ともどうぞ、皆様の御協力を賜りたいと思いますので、よろしくお願いいたします。ありがとうございました。